

あいち技能マイスターの第1号に選ばれた



TEKNIA技術者

(うさみ・まさる)

宇佐見勝さん

TEKNIA(テクニア、本社名古屋市中川区)は工作機械や航空機の精密部品の切削加工を手掛ける。高硬度な鉄、ステンレス、チタンの加工を得意とする。素材を選ばない技術力を誇る。技術者の宇佐見勝さん(60)はマシンングセンター、NC旋盤、研磨機などを使いこなし、30年以上にわたって、切削加工技術を守り続けてきた。社内の技術者養成講座の講師も務め、次代を担う若手技術者の育成に力を注いでいる。2007年に「あいち技能マイスター」に認定されてからは、工業高校の生徒の指導にもあたっている。



「田周上に等間隔で6個の穴を開けるには、どつこう方法がいいかな」。宇佐見さんが尋ねると、2人の若手技術者は首をかじげながら、しばし考え込む。TEKNIAは本社社屋の一部を研修所に改装。切削加工の基本的な技術を習得させるための「テクニアカレッジ」を開催

素材選ばない切削 30年



「説明は分かりやすく」がモットー

とする。充実した研修内容が同業者の間で口コミで評判となり、他社からも受講生を受け入れるようになったという。取材当日、宇佐見さんがボール盤の操作などを指導していた人も他社の社員だ。宇佐見さんは受講生に対し、常に語りかけるように接する。身振り手振りを交え説明する姿からは、相手に伝える熱意があふれている。ただ、自分自身が

「あいちマイスター」1号 社内外で講師でも現役

している。図面の見方や工作機、工場で指導する。機械の刃物の選択から、ボール盤、テクニアカレッジは、社内の旋盤、フライス盤を駆使した加技術力向上のための研修を起源



テクニアカレッジで若手技術者を指導する宇佐見さん

受けた指導はまったく違うものだった。かつて工作機械メーカーの購買部門にいた宇佐見さんは、「どうしてもモノづくりがやりたい」とTEKNIAに転職。以来、「背中を見て覚える」の職人の世界に身を置き、必死に技術を身につけた。
「入社した当時はスパルタ式の指導が当たり前。高橋弘和会長(前社長)や先輩に教わりながら、自分で本を読んで加工機の操作を覚えろ」。
努力が実り、のちに社内で「マシンングセンターのスペシャリスト」の地位を築いた。そんな宇佐見さんにとって技術力とは、単に機械を手際よく操作することではない。最も効率的に加工を完成させる手段を考える力だ、という。
「マシンングセンターのプログラムを打つこと自体はさほど難しくない。大事なのは、モノを削る順番をうまく考え、機械をどう生かすかだ。例えば、加工物の形状が丸物か角物かでマシンングセンターを使う順番が変わる。加工物をどこから削り出すかで形状がどう変化するかを見通す力も持たなければならぬ」。

宇佐見さんが後進に伝えたいのは、こつした目に見えない部分だ。その思いが原動力となり、あいち技能マイスターとして工業高校にまで指導の領域を広げている。

現在、社内では工程の設計や管理を担当しているが、人手が足りないときは自ら加工機の前立つ。現役を貫きながら、モノづくりの伝承にも力を尽くす。